

現代日本人の心に眠る伝統的精神文化の覚醒

漆と妖怪

A2201611 小林 由布佳

研究の背景

大量生産、大量消費社会の現代の日本にあっては、伝統的精神文化が薄れているように思える。伝統的精神文化を情緒思考の文化と捉え、情報社会である現代において本質を選択する能力として必要不可欠なものである情緒力を育むため、古来よりある日本独自の文化意識をテーマとして研究制作をすすめる。

研究の目的

伝統的精神文化が薄れている現代日本人の情緒を育むことを目的とする。これを目的とする上で、江戸時代の庶民のもったいない精神が生み出した付喪神(九十九神)をデザインに用いる。また、付喪神の表現としては、乾漆技法を中心に用いて立体感のある手箱を製作する。

研究のプロセス

- 事前調査・研究
…九十九神、日本文化について文献等による調査、どのような形で表現すると効果的か考察
- 成果物、デザイン決定

[制作工程]

- 箱
木地制作、木固め、布着せ、めすり、蒔地(二辺地2回、三辺地1回)、固め、錆付け(図1参考)、捨て塗り、追い錆、塗り、加飾
- 妖怪
木粉粘土原型制作、固め、布着せ(図2参考)、めすり、錆付け、塗り
- 目玉
木地制作、木固め、錆付け、捨て塗り(図3参考)、追い錆、塗り、加飾
- 接合(箱、妖怪、目玉)、接合部の調整、塗り仕上げ



図1 箱 錆付け

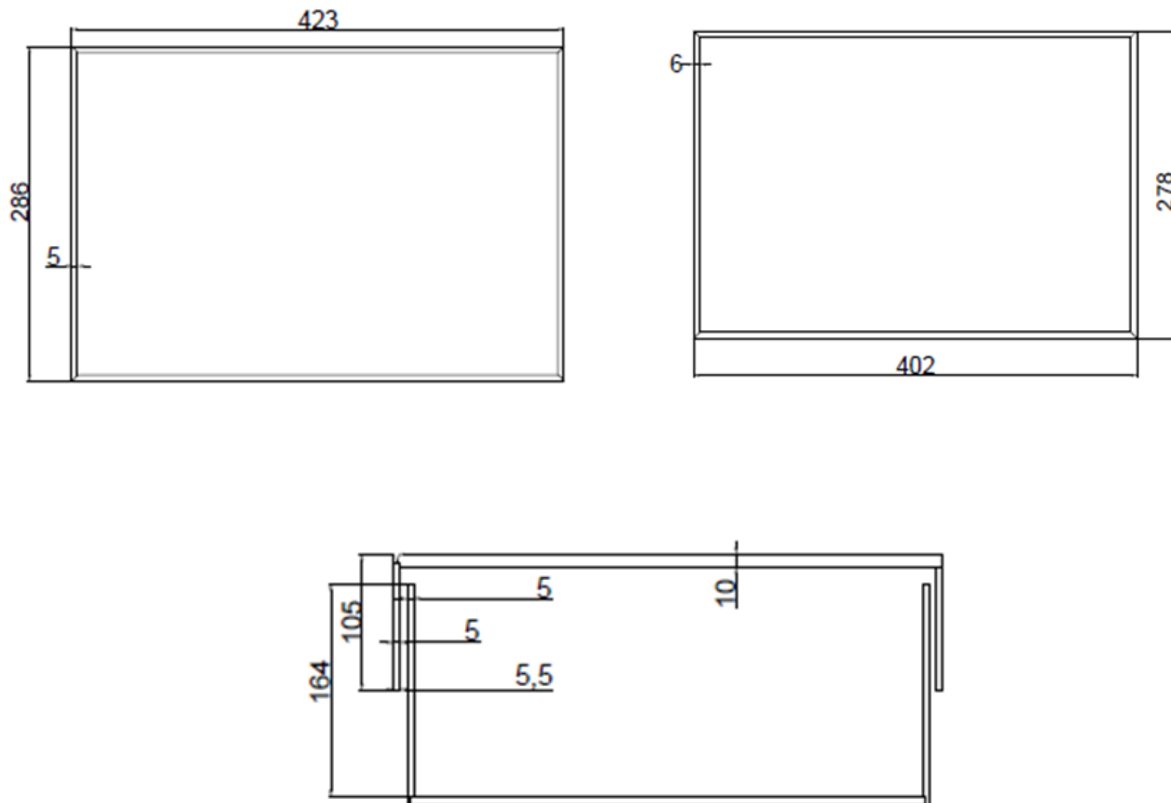


図2 妖怪 布着せ



図3 目玉 捨て塗り

成果物(完成作品)



制作の趣旨に近い形態でもある平安時代の作品「野辺雀蒔絵手箱」を参考に、手箱を製作した。妖怪の立体感を表現するために木粉粘土を用いて原型を制作し、仕上がりを全体的にマットな質感にすることで、目玉のツヤを強調させた。

考察

「漆器は100円で購入できる」という友人の一言から、現代日本人の漆に対する認識に疑問を感じ、私の研究が始まった。そして、研究目的を「伝統的精神文化が薄れている現代日本人の情緒を育むこと」として作品を制作した。それを目的とするうえで、つくも神や日本文化の調査をしたが、その調査結果を作品制作にどう反映するか、効果的な表現方法を考察するのが難しく、デザインの決定に最も苦労した。

「現代の日本人の心に眠っている伝統的精神文化を呼び覚ますような作品」を目指し、つくも神を題材に、手箱が妖怪に変容する様を表現する為に「目」の存在が欠かせないと思った。まず、人がそれを生き物だと認識する上で、目に代わる部位は無いだろう。喜怒哀楽の感情が最も顕著に表れるのが目である。それだけに、「見ている」・「見られている」という関係には、感情の揺らぎという不思議な力を持っているのだと思う。

この「目」は今、何を見て、何を訴えているのだろうか。

この作品をきっかけに少しでも多くの人に、大量消費社会の現代の日本の姿に違和感を感じてもらいたい。